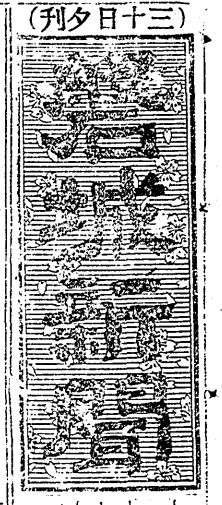
(三十日夕刊)

休刊　大祭　第一　第三日曜

定價　一ケ月　一部　二錢　郵税　六十錢　十五錢

廣告料　磐城新聞社　磐城新聞社　安行所　福島縣平町田町十六番地　發行兼印刷人　瀧沼龜輔



筆のすさび

投書雜々相

賣名・自己陶酔・眞面目な創作等々

赤井嶽男

或る惡戯

愛事作

（承前）　前項の目的で頑次　戯

か少なからず迷惑を喜ばせた。夜になると疲れきつた身に鞭うつて神田の英語學校へせつせと通つた。こうして色も戀もない血の出る様な苦闘へ忍從の三ケ年は遂くも過ぎて、年の終りに英語を校ケ卒業する事が出來た。

その年もはや暮れて新らしい四年目の正月を迎へた。正月の中頃或得意先から「山岡さん、築地にある優逸のアンドリウス商會が君の樣な美面目に英語の素養があり、社員を捜してるんだから行つて見てはどうです」と勧められた。その頃既に私はB洋紙店の高級店員に扱擢され非常に重要視されてゐたが、英語を習つて自分の真價を發揮するには矢張り外國商館邊りが適してゐると自分は考へた。

商會と言ふのは獨逸に本店があり世界で第一流の貿易商である事は前々から聞いてゐた。

間もなく私はB洋紙店を惜まれながら退店すると先輩の大塚君等に素人下宿を見付け、築地のアンドリウス商會へ通ふ事になつた。

自分の口から申すのもおかしな話ですが質朴一徹の面目なのが、主人夫婦と一人娘の小夏子に殊に入られて、家族の樣な待遇を受ける事が出來た。

茲に初めて、小夏子と言ふ女性を知つたわけです。親戚もない孤独な話しかふ友人もないこの廣い東京に初めて異性の友達を持つ事が出來た。

過去　於て。私にも戀愛と名のつくものを味はない わけでもなかつた。B洋紙店にゐる頃主人の娘絹代に淡い戀心を抱いてゐたが、戀をするには餘りに環境が不調和だつた。多忙で戀を囁く間もなかつたし自分の淡い戀心も彼女にはさつぱり通じなかつたらしい。

小夏子の明るい瞳とブロフアエルが儚いな戀に終つた、絹代によく似てゐると言ふ事が尠からず、私の心を魅惑してしまつた。

そして彼女も次第に、好意を寄せてくれる事が私に助かに感じられた。

だが最初私は女と言ふものを警戒した。學校を出たは校長から「人生の失敗の原因は酒と女だ」と注意せよ」と言はれた事を思ひ出したからでした。然しいくら時日が立つても彼女の何處にも惡と言ふ事が見出す事が出來なかつた。そして純真な心に今迄疑つてゐた自分が返す〳〵も恥しい樣な氣がした。

今迄の闘と忍從のため貯水池の水の樣にせきとめられてゐた自分の愛が奔流の樣に流れ出して。その頃愛は戀へと變つて行く事を明かに自分で意識する樣になつた。

やがて春が來て、夏が去り、秋になり、その年も暮れて愈々五年目の忘もしない記念日の四月一日——故郷へ仕所と現在の境遇を知らせる日が近づいて來た。

或夜小夏子を連立つて何ケ月振りかで銀座へ出て見た。彼女は途々「あなたを初めて見た時から妾は他人の樣な氣がしなかつたの、決して」

「これからも離れないでね！」

彼女はいつも寄り添ふ樣にして歩いてゐた。梅も散り櫻もそろ〳〵咲くと言ふ陽氣だつた、それに開店して間もない松屋は人氣の焦點となつてごつ返す樣な人出だつた。故郷へ送る品物を一抱も買つて松屋を出る頃空模樣が惡くなつてポツ〳〵落ちて來た。

—（今月今日）—

△明治天皇教育勅語を降し給ふ（明治二三）△レオンガンベッタ生る、天來の大雄辯家で慷慨義憤國家の安危を一身に任じ鐵心石腸普佛戰爭の際風船に乘り巴里の重圍を脱し伊太利の奇傑ガリバルディーの來援に會ひ佛國をして亡國の辱を免かれしめたものは彼の與つて最も力あり惜しい哉、一八八二年の十二月三十日一婦人の爲に狙撃されて最後を遂ぐ（紀元一、八三七）

△種痘規則制定（明治七）△廣西駐在の佛國預事殺さる（大正一五）

講談

赤鞘安兵衛

東京　桃川燕二演

村田月光書

（八八）

同を吐かしやがる、何も痩浪人などに喧嘩のお相判を頼みやしねえ、俺達の勝手で俺達が喧嘩をするんだ餘計な事を云はず通せ〳〵」口でこそ強さうな力んだ事を云ふが、ビカリッ、ビカリッと光るものが眼の前にチラついて居ては、流石の江戸ッ兒も前へは進み兼ねてゐます——「餘計な事とは何んだ、拙者は貴へ」……「俺ゝ痴漢が頭に腹が痛み出した、筋が釣りやがつて歩く事が出來ねえ」……「何うした〳〵」——「急達の爲に頼まれ、茲に喧嘩の相手に俺が引受けたのだ、是れよく考へて見ろ、假にも親分と云ひ子分と名乗る時は親子も同樣の仲合親の言葉に服すべきが當り前なのに、見世物小屋を壞すなどゝ亂暴な事をしてはならぬと云ふにそれを承知せず、親の心に逆つて亂暴に出掛ける、是れも除計やア手前先へ通ろ。……俺な世話と云ふか、サア命の入らぬ奴、通行して見ろ、首は川の中へ飛込むぞ」と人活眼を見張る、今日の神國橋で逢つて其頃の松橋の幅が僅か二間ばかり、其の真ン中でビカ〳〵やられては强いて通る譯にはならない——「親分が頼んだのだ」……「ウム聽いた、俺が頼むのに事を缺いて、厄介なものに頼んだちやアねえか、どうしよう」……「何うしようたつて、命の入らねね奴は通れ、首が川ンの中へ飛び込むと云ふぢやねねか、小屋を叩き壞してからやられるなら仕方もねねか行く道でやられたでは犬死になる」……「そんなら止めるか」……「止めるかと云つて、此の儘ぢやア引ッ込みが付かねへ」……「やるか」……「あの刀を見や、ビガ〳〵能く光るなア」止めるかな」……「然うも行くめえ」……「やるか」……「其處でだ、た前はどうするんだ」……「然っさなアあッあ痛たゝゝゝ

筑城新聞

全國の各學校中

恐らく最初の奉讀？

四十年前の煥發當時を偲ぶ

時の少壯校長小泉湯本町長

けふ湯本小學校に於て教育勅語煥發四十周年記念講演を行つた同町長小泉三代吉氏は教育勅語發布以來學校の式典で之れを奉讀したのはたぶそらく日本國中で最初の人であらうといふ話、今から四十年前、教育勅語煥發の際治二十三年には、小泉氏は湯本尋常小學校の校長であつたが、新聞紙上で勅語の煥發を知つた同氏は新聞より寫して土田郡長に淨書せしめ、十一月三日の天長節式場に奉讀したのであつた、文部省が小學校の式に教育勅語を奉讀すべく定めたのは、翌年の記念節からであつたから、これを最初に奉讀したのは、慥に同氏であらうとの話を聞いた現湯本小學校長篠原保治氏は町長に繼んでけふ記念講演をして貰つたわけであると、この當時の若い校長先生の嚴格な教育ぶりは有名なものであつたが、その後の湯本町は、博士、學士其他各數の高等學府出身者を產出したのは、町民が常に鄕黨の譽れとして誇る所であるが、小泉町長は、選中の處本縣からは五來る十一月九日を期し同町出身の名士を招き記念講演を開